

やくわえ

NO. 55

平成8年8月1日発行
東京都神道青年会々報



平成7年度 事業報告

*主たる事業と特別事業

- 1. 大東亜戦争終結50年にあたり行った事業
 - ①終戦50年東京都殉難者慰霊祭
 - ②終戦50年東京都出身戦没者慰霊祭
 - ③東京都南方諸島戦没者慰霊祭
- 2. 教養講座の開催 ……………2回
- 3. 古典講座の開催 ……………10回
- 4. 神道行法錬成研修会 ……………2回
- 5. 雅楽研修会
- 6. 会報「やくわえ」発行 ……53号・54号
- 7. 会員名簿の作成発行
- 8. 教化ポスターの作成 ……厄除けポスター
- 9. 府中刑務所大祓奉仕
- 10. 会員相互の親睦 ……………2回 (族懇親会と忘年旅行会)
- 11. 健康診断
- 12. 神青野球部諸活動 ……一都七県神社庁親善野球大会・東京都神道人野球大会

こんなにも多くの会員の参加がありました！

平成7年度活動集計

* 諸会議・諸研修等の開催数	92回	参加者総数	1,480 名
* 奉仕・諸団体との懇親、協力等	19回	参加者総数	124 名
* 神青協関係諸会議・諸研修等	29回	参加者総数	147 名

(注、各事業の詳細につきましては別紙「定時総会資料」をご参照下さい)

平成8年度 事業計画

- 総務部 本会に運営が円滑に進行するように、各部と連携をとりつつ事業を進める。
- 教養部 青年神職の心身の鍛練をはかるため、より積極的な各種活動を企画実践する。
- 教化部 例年にならい、青少年・氏青協関連の事業に加え、神社の位置付けを地域社会へ教化する活動を展開する。
- 渉外部 神道青年全国協議会・神青協1都7県協議会などの主催の行事・研修会への積極的参加促進を行い、本会並びに会員の成長に寄与する。
- 事業部 会員、家族の福利厚生を念頭に、伝統事業の継承と身近な親睦や交流の場を企画設定する。
- 広報部 会員相互の情報の接点となる、親しみやすい会報の定期的発行と広報活動に務める。
- 神青会50周年準備委員会 () 平成9年度に組織される実行委員会が、スムーズにそのスタートをきれる様、過去の記念事業を研究し、叩き台となるものを準備する。
- 時局対策特別委員会 () 戦後50年の歪みが一度に吹き出した観すらある昨今、この時代に育った我々若手神職自らが「日本の心」を考えてみる。

神青フォーラム

明日への提言



こうした状況は神社の教化方法に問題があるのではないか。また八王子でおこなわれている業者と提携して車でどこでもいく地鎮祭請負神主もおり、神職のモラルそのものも乱れているのではないか。



ある区でも他県の神主が業者からのいらいでわざわざ出張してきている。



を通じて氏子をもっと教化する必要がある。

また、東京では古い社会と新しい社会（旧住民と新住民）の二重構造の断絶が大きい。

神職は進んで地元自治会の役員を体験したほうがいい。

神社はメディアを利用して、世の中のニーズにあった教化活動をもっと積極的に展開すべきではないだろうか。

しかしニーズに迎合したほうがいいのか、伝統を守ったほうがいいのか？疑問もある。たとえばなぜ七五三が氏神様でない大社に集中するのか？神社のブランド化、差別化が進んでいるのではないだろうか。

こうした諸問題は神社本庁が指導は正すべきではないか。

神社本庁にはそこまでの指導力はないのではないか。

そもそも現在に氏子制度は、明治時代にできた以外と新しい制度だから拘泥しなくてもいいのではないだろうか。こうした面で先生の先生方と、現場の神職の認識に

今年東京都神社庁設立五十周年の記念すべき年を迎え、庁で企画されたシンポジウム「神社神道の未来を問う」に都市神社と神職の将来について先に先行して神青独自のフォーラムを六月十三日に開催しました。

以下の発言は当日の出席会員諸兄の貴重な発言録です。

〔まず司会者基調解説〕

神社神道の「理念」は歴史的に変化してきたのではないかと？

神社は神職がいなくても、永遠に存続していく。

神社信仰の形態は過去から現在とさらに未来へと同じ形で継続しているわけではない。

神社に魅力を感じない若い世代に対する教化活動が足りない。

若い人へターゲットを絞って神社からのアピールをもっと働きかければよいのではないかと。

若い人や神事をしらない人のために地鎮祭の撤下品として簡易神棚を渡して教化活動をしている事例を紹介。

境内地を公園と勘違いしてただ遊びに来るだけの若い母子をみていると、果たしてこのままでいいのか疑問に思う。

本庁設立五十周年記念作文コンクール入選作品集を読むと、母親層の神社での思い出は殆ど個人祈願に集約されていて、祭り等集団行事が心に残っていない。



そういえば一部建築業者の見積書にちゃんと地鎮祭諸費用の項目がすでに記載されている。地鎮祭で氏子は何もわからないまま業者にすべて任せてしまうので地鎮祭

は大きな違いがある。
 (神社のブランド化、差別化)
 について、神田神社ではどう考えていますか？



神田では確かに氏子地域が広いのでブランドを活かしたマスコミを利用して常に神社の活性化を計っています。

これからは氏子という縄張りに拘泥しないで、新しい人をどんどん受け入れる体制作りを神社はすべきではないだろうか。

そもそも神社界のいいところは全国画一化しない(多様性を容認する)ところで、理想は各々の神社が各々のやり方で互いに発展していくことではないだろうか。また神社は氏子地域の住民の全員を氏子と勝手に思いこんで、さらにその氏子に何も情報発信をしていないのは神職の怠慢ではないか？

神社自身は潰れることはないけれども、怠慢な神職はこれから淘汰されていくと思う。なにせ神社は「理念」がなくてもずーっと続いていくから…

たしかに氏子が「〇〇神社の神主には御祓いを頼みたくない」などという声をよく耳にする。



考えれば、氏子にとっては神社(神主)がなくても基本的な生活は成り立っていきまますよね。

庁の「初詣は氏神様から」のポ



スターは氏子教化の大変いい事例だと思ふ。

とにかく氏子意識が人々から薄れてきている現状を憂慮して、マスコミを利用してTVコマーション等で教化活動を推進したい。

ホテルには聖書や仏教聖典が備えられているのに何故、神道の本がないのか？神社界は胡座をかいているのではないだろうか。仏教は多くの宗派があり互いに淘汰を繰り返している。神職自身の意識改革が必要ではないだろうか。

マスコミといえば神宮式年還宮ですらローカルTV局(三重放送)しか特別番組をくまなかった現況は神社界に厳しいものがある。



核家族が進んでいる現在だからサーファーでも理解出来るような教化方法を模索したい。

たしかに、地鎮祭を行うことすら若い人たちは知らない。

今後は神社自身がどういうふうな、その社会的在り方を変えてい

くか真剣な議論が必要と思ふ。

四谷にある寺では、本堂に現代美術館を併設して、若い人を対象にしたクロスオーバーな活動を展開している例(生前墓の組織作り)がある。

フリーマーケット等に境内を開放して、信仰とイベントをクロスオーバーすることはできないか？

しかしフリーマーケットを開催して神社の品位が落ちることもあつるし、信仰以外の方が来てもあまり意味がないのでは？

そもそもフリーマーケットをやりたいくても総代会で反対されたら境内で開催できない。

うちでは植木市を開催して三千人の人が集まるようになった。(表通りから入った所にある神社は)イベントを開催すれば人々に認知してもらえらる。因みに杉並区では人口の30%が5年で移動し、10年以上在住者は20%しかいず、小さな神社は常にアピールしないと、どんどん大きな神社に氏子を奪われてしまう。

神社は常にアピールして人寄せの方法を考えないといけない。しかし若い神職の意見は、年老いた

総代にはなかなか理解してもらえないことが多い。

いつだったか、宮司さん大きくなったねと五百円のおこづかいを頂いた。啞然。絶句。小さな神社の神職と違って、大きな神社の若手神職は、こうした苦勞をしなければならない。

王子神社さんの田楽の復活はよかった。なんでも神職の意欲と努力があればできる。

それには神職の資質の向上が必要。

神職としての誇りを持てる体制を自分たちで築いてゆきたい。



千住の七福神詣の事例説明。千住の若者減少に対する活性化のため。結果として氏子外の参拝者が増えた。

神社の存在を、いかに社会にフイードバックできるかが今後のキーポイントとなる。

信仰心だけを氏子に求めても参拝者は増えない。やはり信仰以前のイベントを通して神社に人を集めることが先決ではないか。



寺はお骨を預かるから檀家の信頼の度合いが深い。

歴史を振り返っても、昔の人がことさらに信心深く、今の人がことさらに信仰心がないともいえないのではないか。

イベントも大切だが、神職としての誇りを如何に持つか真剣に考えてゆきたい。阪神大震災では六十名の会員がボランティアをしたことも誇りだ。

しかし「神社界は神社の救援しかなかった」という批判もある。作家の(田中康夫氏の意見)

うちの隣の寺では檀家を挙げて境内で非常時の炊き出し訓練をして二百人分のカレーを作りをした。神社界もフットワークをよくして普段から非常時の準備をするべき必要がある。そうすればイザという時に神社界の「誇り」が生まれるような活動ができる。

とにかく現場に急行して何かをすることが必要。

阪神大震災の初期に全神協でもバイクでシートやシャンプルーを配る活動もした。その後、まず氏子の心の拠り所である神社の復興を第一にすべきと考えて行動した。また他宗教団体では宣伝と見紛う旗を立てて救護所を開設していたが、どうかと思う。

全神協の組織では即座に多数の人を動員することは不可能。ボラ



ンティア慣れしている宗派などは即応体制が整っているが、神社界では初動が鈍い。

そなえを今後各社考えて行く必要がある。

緊急時に神社界では組織が有効に働かない。



今後、神社に人が多くあつまるといえるならば、自然と神職の資質も向上するのではないか。イベントで人を集め、そこから崇敬者を引き出すのは神職の力量次第。

神社のことを知ってもらうために人を集めるべき。(イベント優先では決していない)

やがて、宗教法人法が大きく変わると、小さな神社は法人である必要がなくなるのではないだろうか。また弱小神社は庁の指導で統合する方向へ進むのではないか？未然に防ぐためには代弁してくれ政治家を擁立すべきで、本庁や



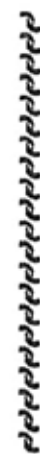
庁には数十年後の先を見通した活動方針を見極めて欲しい。

神社は必ず宗教法人格を保たないといけないものか？兼務社は法人格のみ合併しても問題が無いのではないだろうか。(境内、祭事等は従前通り) 法人格は単なる国家の行政上の認定にし過ぎない。それに拘泥する必要と信仰は別の次元で考えていい。法人格を合併しても本務社の境内外飛地として従前通りの信仰を守れば問題は無い。

兼務社の建て替えて世話人に一人三百万円ずつ奉納して下さいと言ったら、お金がないから本務社に合併して欲しいと氏子自身が言う。

聖と俗を区別して兼務社を合併して守る方法も考えられる。

青年神職として今、何が出来るか出来ることを即実行に移すことが肝要だ。神青教化部では地鎮祭や神事解説の葉を低価格で作成する予定です。従来の神青の流れを違ったものにした。



まとめ

やはり今日の会では、結論らしいものはできません。しかし今後こうした討論の場を設けて、様々な検討課題として意見交換をしてゆきたい。

司会者

テーマ別に自由に意見を出し合える会も開催したいので、今後ともみなさん一緒に考えて下さい。

委員長



活動報告

新年会

一月十三日に恒例の新年会が午後四時より百五名参加にて神田神社明神会館で催された。新春講演会として本年は、食文化史研究家の永山久夫先生をお迎えし、「ハレの日・若手神職の出番」と題した講演を伺った。神田神社正式参拝の後、堀江総務部長の司会により新年会は進行、斎藤副会長の開会の辞に続き神宮を参拝。松本会長の挨拶の後、来賓を代表して宮西庁長並びに今井副庁長より御祝



辞を頂いた。神田神社大鳥居宮司の御発声により乾杯、暫し和やかな宴がもたれ、また事業部の福引きの余興もあり大変盛会であった。

出席者全員での「うるわしき山河」の合唱をもって散会となったが、仲の良い者同士別れがたく、その後は二次会、三次会と場がもたれたようである。こちらについては詳しいご報告ができないのが残念である。(八木光重)

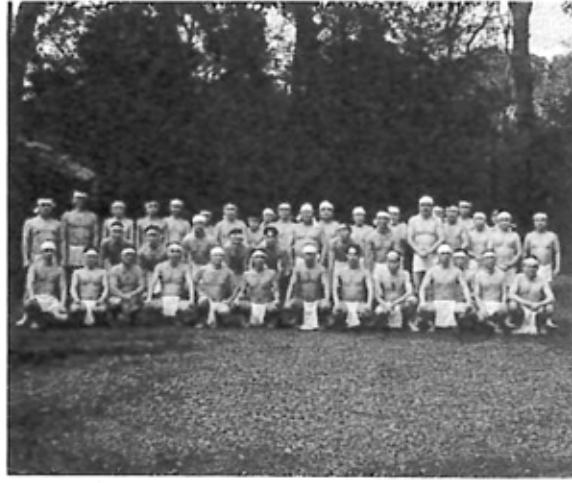
大寒禊錬成会

去る一月十九日、一段と寒さ厳しき中、氏青会員を含む四十二名の参加者により明治神宮に於いて大寒禊が開催された。篠直嗣先生指導の下、錬成行事を行い、のち正式参拝、神楽殿に移り松本会長の挨拶にて修了した。(大野定好)

「大寒禊」参加者名

斎藤直孝道彦、篠直嗣道彦、松本仁、斎藤明比古、斎藤博明、今井達、小俣文弘、本橋宣彦、清水祥彦、小俣章、野澤康次郎、森田一、水谷敦憲、奥野雅司、八木健一郎、八木光重、星野誠、大丸真美、滝雅人、小西啓文、半田裕明、永島康彦、北川正訓、白石元、大山晋

吾、大橋知也、村田佳紀、鈴木隆弘、梅原正敬、吉田伊織、船木信忠、澁谷武宏、宮崎吉史、松田直之、野口次郎、瀬川昌之、大野定好（以下氏青）、由井啓太郎、小竹宜義、神山真一、東使孝道、田中宏明、田中達郎、杉谷宗彦。（合計四十二名）



神青協中央研修会参加報告

昨年の神戸大震災の為中止されていた神青協中央研修会が、二年前ぶりに山口県にて「日本人の心とことば」を主題に、二月二十六日、二十七日と開催され、当会から十一名が参加した。歌人の國大栃木短大学長岡野信彦先生により「日本人の心とことば」と、中原中

也記念館館長福田百合子先生の「中原中也の世界」は公開講演、分科会として「神道講演について」「和歌について」が実施され、後者では、事前に参加者より集めた和歌の評論が行われた。基準は、①道徳的教訓的は×②比喩は×③事柄をそのまま述べるのは報告×④通俗×⑤見たままの写実×何を感じたのか⑥原理道理格言慣用語×⑦散文×韻文⑧人情的×。（大久保直倫）

氏青協バス研修旅行

東京都氏子青年協議会（小竹宜義会長）のバス研修旅行が、三月十日十単位会七十七名の参加を得て開催された。一行は山梨県は浅間神社に正式参拝したのち、善光寺・地場産業センターにてショッピング。その後石和温泉ホテル「新光」にて入浴及び昼食を取りながら各単体会事業報告。そしてまだ飲み足りない会員のためにメルシャン勝沼ワイナリー見学と和やかな内に楽しい一日を過ごした。尚、この企画は氏青協の事務局として補佐している教化部が、氏青会員親睦を深めることを目的の初めて企画した事業である。

（小俣 章）

平成八年度「定時総会」開催

四月十六日、神社庁に於いて平成八年度定時総会が七十二名の会員及び来賓の出席を得て開催された。まず、斎藤副会長の開会の辞で総会に移り、松本会長が「先輩方からの伝



統に新たな息吹きを加え、若さあふれる会をめざし、全国青年神職と連携し、神職としての自覚を持って活発に神道の教化活動を展開しよう」と挨拶した。次いで来賓紹介の後、宮西庁長から祝辞があり、今井議長のもと議事に入り、平成七年度事業、特別事業、決算、監査の報告が行われて拍手で承認された。引き続き平成八年度事業計画案、特別事業計画案、予算案が審議され承認可決され

た。本年度は特別事業として時局対策に加え、神青会創立五十周年準備委員会が組織され、創立五十周年に向けての準備が始まる。議事終了後、来賓の神青協北方会長から祝辞があり、斎藤副会長が閉会の辞を述べて閉会した。（堀江久教）

防災研修

総会に先立ち教養部（森田部長）の企画により「防災研修」が行われた。赤坂消防署防災課の方々を迎え、地震対策のビデオと起震車を庁舎前に持ち込んだの体験研修であった。阪神大震災の記憶もあるだけに、起震車での「震度7」は想像を超えるものであった。今後は火気の始末、身の安全、脱出口の確保、の3点を日頃より心掛けておきたい。（鶴岡隆志）





本庁五十周年記念式典奉仕

五月二十二日に日本武道館に於いて本社本庁設立五十周年記念式典が開催された。十八名の会員が参列者誘導の手伝いをした。午前中は雨が激しく降るあいにくの天

全国植樹祭両陛下へ奉迎

五月九日初夏を思わせる天候の下全国植樹祭が江東区辰巳公園にて両陛下をお迎えして行われた。当日青年会から二十名が国旗配り等のお手伝いを行い、後に一般奉迎の方々約五百名と共に賑々しくお出迎え、お見送りを行った。

(内海寿之)

「白石の名著を読む」
〜古典の世界への誘い〜

気であったが、終了時には晴天が広がり、式典は盛況で幕を閉じた。
(田村康雄)

五月二十日、今年で四年目となる古典講座が開催されました。今年度より、新たに國學院大學講師の三澤勝巳先生を迎え、作品は新井白石の名著「折たく柴の記」を学んで行きます。儒教・朱子学をふまえながら進みますのでより興味深いものになるはず。

開催日は毎月第二月曜日午後六時から。会場は東京都神社庁に於いて毎回、講義の要旨を用意しますので、途中から参加される方も十分に楽しめます。参加希望者は教養部まで。尚、受講料は千円です。
(森田 一)

神青協
一都七県協議会総会

六月三日群馬県は伊香保の地にて第二回「一都七県協議会の総会」が東京神青より十七名が出席して総勢百余名参加の下、賑々しく執り行われた。総会終了後、研修として伊香保神社正式参拝、竹久夢二記念館見学を行った。
(内海寿之)

これからの都神青主要行事

8月 9日 (赤口) 神道人野球大会	
8月12日 (先負) 午後 6:00~第4回古典講座	11月11日 (仏滅) 午後6:00~古典講座
8月19日 (赤口) 午前 9:00~雅楽研修会	11月26日 (先勝) 午後6:00~連絡会
20日 (先勝) "	11月28日 (先負) 忘年旅行
8月27日 (友引) 午後 6:00~役員会	29日 (仏滅)
9月 9日 (先負) 午後 6:00~古典講座	12月 7日 (赤口) 府中刑務所 大祓式奉仕
9月30日 (先勝) 午後 6:00~連絡会	12月 9日 (友引) 午後6:00~古典講座
10月 3日 (仏滅) 午前10:00~健康診断	12月11日 (大安) 午後6:00~役員会
10月14日 (大安) 午後 6:00~役員会	

書籍紹介

「お米は生きている」
富山和子著
講談社一、三〇〇円



(あとがきより)
先祖達が現代に贈ってくれた山紫水明の国土を、どうしても次代の子どもたちに残し伝えたい。森林も実は米がつくつています。そうしたことを忘れ、米を単なる商品として扱い、工業とも、外国の農業とも競争させた結果、ついに日本農業を有史以来の危機に追い詰めてしまった。ちなみに現在日本の穀物自給率は二二%。かつて食糧の輸入国であったイギリスも、食糧を他国に頼ることのみじめさを経験して、国をあげて農業のたてなおしにとりくんだ結果、今では一〇五%。アメリカでは、今までのように輸出に力を入れることをやめ、土づくりから出直そうと、方向転換がはじまったことも報告されています。米づくりを中心とする農業というものの意味、人間が汗を流してものをつくる、ということの喜びや尊さ、また身近に土があり水辺のある環境のたいせつさなど、子どもといっしょに考えてみたいと思います。

神青コラム

東京での全国植樹祭、東京都神青も江東区辰巳で、集まった人々とともに、天皇皇后両陛下の御奉迎を申し上げた。天候不順の折、実にこの日は天皇晴れであった。

かつて皇太子殿下ご成婚パレードの実況で、中村メイコさんが「雨が上がり、日がさしてきました。私どもは不思議な国に生まれたもの」と、感激を語っていたのを想起した。

武道館での神社本庁設立五十周年式典。この朝、日経新聞に夫婦別姓法案国会提出見送り有力が報じられた。(決定報は六月十二日付毎日)

我々はスタッフフジヤンパーに身を包み、会場誘導係などご奉仕をした。

第一部式典では、常陸宮・同妃両殿下のご台臨・期待のお言葉を賜った。

総長は聖寿萬歳に絞り、決意表明の読みあげは神青協会長に託された。(この日参加者全員で靖国参拝と、皇居前で聖寿萬歳したならば、感激はより深かったであろうとの声もあった。)

第二部メッセージ。四名の登壇者のうち、平岩弓枝女史のお話の中で、——敗戦の後、夜中に代々木八幡の境内の木々を、誰からか

伐っていく。

或る家では煮炊に、或る家では暖に役立つたのでしようが。

当時宮司であった父君が怒るかと思つたら、がっかりはしたが、その後爪に火をともしようなお金で、苗木を一本また一本と植え続けられた。

父君がおつしやつたのは「この木を植える人がいなくなった時が危機なのだ」と——。

これを聞いた時、過日の植樹祭の精神の大切さと、「お米は生きていく」(前頁書籍紹介参照)のことなどを改めて思った。

かねて弓枝女史のご夫君は、神宮ご遷宮の意義の一つを、「廃墟バルテノン」と対比させ、感銘ぶかく説明されているが、これは人々の次代への精神継承の重要さ、という意味である。

中今を生きる私共の使命の一は、精神を祖先から子孫に繋いでいくこと。そのためには確固たる「家」の継承と、それを支える祖先祭祀・教育力が大切で、それがひいては国づくりに繋がると思ふ。

第三部さだまさしコンサートラストは、「風に立つライオン」——それは神道青年に送るエールのように聞こえた。(葦津元成)



新入会員紹介コーナー

- 下谷神社 (台東区) 御田村俊一
 - 根津神社 (文京区) 新垣 義昌
 - 湯島神社 (文京区) 小野善一郎
 - 天祖神社 (杉並区) 宮澤 良和
 - 鹿島神社 (品川区) 大野 素道
 - 大國魂神社 (北多摩) 飯塚 礼寿
 - 大國魂神社 (北多摩) 柳田 斎継
 - 阿豆佐味天神社 (北多摩) 宮崎 慎
 - 氷川神社 (北多摩) 栗原 孝典
- 皆さん、よろしく!

〔広報部の独りごと〕

*諸先輩から引き継いできた本誌も五十五号を重ね、表紙をリニューアルしてみました。如何でしょうか？

*表紙写真伊勢神宮林の風景です。祝詞によく使われる「五十檀八桑枝の如く」という言葉からタイトルをいただいた当誌にとっては、天空を目指して伸びゆく若木のように会が発展してほしいとの願いを籠めて今回の表紙写真を選択しました。

撮影者は神社新報社の松本滋氏です。使用のご許可をいただきました新報社と同様に厚く御礼申し上げます。

*今期に入ってから連絡会が盛況です。堀江総務部長の様々な努力が実り五月は三十七名、七月は四十五名と着実に参加者が増えていきます。ますます有意義な会にするためにも積極的な出席をお待ちしております。

平成八年八月一日
東京都神道青年会
東京都港区元赤坂二丁目三
東京都神社庁内
電話 三四〇四一六五二五(代)